

# 誕生日に母を語る

誕生日は年に一度自分を産んでくれた「お母さん」を思う日…。



## 尊敬する母と大ゲンカの末に気づいたこと

柿沼 忍 34歳・秦野市

一本ピンツと筋が通り、世間体や時代の流れに左右されない、信念を持った母。子どもの頃よく言われたのは、「人は人、家は家」という台詞。「勉強より大事なことがある」「働かざるもの食うべからず」と厳しい母だったが、子どもながらに、筋を通して生きる姿はかっこよく、尊敬していた。きれいな好きで、家はいつもこざっぱり。そういうところに、家族への愛を感じていた。

## 子どもの声が心地よく響いていますか？

text: 木村 乃  
ビズデザイン株式会社 dk@biz-design.co.jp



先日電車に乗っていると、品川駅で2歳くらいの男の子が親子3人で乗車してきた。「トッキューみえるねえ」「アサマいないねえ」と電車が大好きらしい男の子が大きな声で両親に話しかけていた。

そのときのほかの乗客の様子。そ知らぬ顔の人が半分くらい。残る半分のうち3分の2くらいの方はチラ見したあと眉間にしわ。静かにしてくれ、といった表情だ。残りの3分の1くらいの方は男の子の様子を見ながらニコニコしていた。

ぼくだって仕事に集中しているとき、子どもに話しかけられると「あっちに行ってる!」と追い返すことがある。

眉間にしわを寄せている人が皆、子ども嫌いということではないだろう。ただ、これだけは言えそう。子どもの声を耳にして心地よさを感じないときはストレスがたまっているときだ。子ども嫌いという人は慢性的なストレスを抱えている。何の根拠もないけれどそう思う。

今日あなたの耳に、お子さんの声は心地よく響いていますか？ お父さん。

## オババの育児日記

### 子ども大学が誕生しました!

先日、お母さん大学初の1泊2日合宿に、孫のたっくん(拓斗・4歳)ととうま(斗聖・11か月)も参加。研修を受けているお母さんに同行した子どもたちが、別の部屋で子守隊と遊んでいた。

長時間保育だったため、子守隊のジジ、ババに混じって、小学生のお姉ちゃんたちが助っ人参加。とうまが最年少で、一番上のお姉ちゃんが6年生。幼稚園児にハイハイの子…異年齢の子どもたちがごちゃまぜで、2日間を研修所で過ごした。

この日は、たっくんもとうまもかなりハイテンション。後日、子ども部屋の写真を見ると、まさに「子ども大学」。預けられてかわいそうなんて思ったら、とんでもない。どの子も親が知らない表情を見せ、ハジけていた。(藤本オババ)



●小学生のお姉ちゃんが、おむつを替えています。ほかの子は、周りで一生懸命にあやしています。誰に教えられたわけでもないのに…。将来のお母さんたちです。



●子どもたちが見ているのは「お母さん業界新聞」地域版です。全国の地域版を一枚一枚めくって、評価しているようです。豊田版の表紙の絵が、子どもたちに受けていました。



●ケースに入れられてうれしそうとうま。もう、すっかり一人前。みんなの輪に入っています。こうして子どもたちも、お母さんと離れることで、たくさん学んでいます。



●男の子では最年長(6歳)のけんたろうくん。合宿の帰り道、「疲れた〜」と言うお母さんに、「お母さん大学は勉強するところなんだから、疲れるのは当たり前でしょ」と言ったとか。

食を支えるお母さん

ケーキづくりを通して 食の安全を伝えたい

ナチュラランド(東京都多摩市) 山本道子さん(46歳)

安全性の高い食材で生ケーキや焼き菓子をつくっている「ナチュラランド」。オーナーの山本道子さんが一番大切にしているのは、素材の安全性とおいしさです。ベーキングパウダーや一切の添加物を使用せず、材料も手に入る限り安全で美味しいものにと、一つひとつ丁寧にこだわっています。長女がアトピーで、おやつには苦労したという山本さん。

「添加物は魔法の薬。つくり方を機械化し、美味しそうに見えることも安定供給もできません。しかし体に悪いので使えません。長女はハムやかまぼこが給食に出ると、決まってアトピーが悪化、じん麻疹になりました。添加物の毒性については世間であまり認知されていない頃でしたが、長女の体が教えてくれたのです。」

食に安心のある仲間たちと情報交換をしながら、食品添加物について研究した山本さん。添加物や農薬の怖さを知れば知るほど「食べものについて、いかに無知であったか」と思い知らされました。

栄養を考慮するのはもちろん、一つくり手の顔がわかり、自分が納得したものを選んで食べたという思いが強く、砂糖は新光糖業の「洗双糖」を使用。グラニュー糖の白さ、強烈な甘さはないけれど、上品な甘みと豊富なミネラルが特徴です。小麦粉も安い輸入品に頼らず、国産品を使用。ポストハーベストや日本の自給率、フェアトレードなどさまざまな問題の現状を知り、自分のできることで取り組んでいます。

さらに今後は、本来の野菜の旨みに注目し、野菜が苦手な人も食べられる美味しい野菜ケーキをシリーズ化していきたいと山本さん。

「自分たちの口に入る食べ物、しかもケーキといえは子どもたちの大好物。これからは、安全で美味しいものをモットーに日々精進していきたいと思っています。」

http://www.naturland.jp/

\*\*\* 読者プレゼント \*\*\*

木の実はリースケーキ 3名様(2185円相当)

たっぷりのナッツとキャラメルで焼き上げた、シンプルだけど、とても贅沢な味わいのケーキ。サンタや冬のオーナメントを飾ればXmasケーキにもなります。直径18cm 冷凍。Xmasが待ち遠しいですね。

●応募は「リースケーキ」と書いて、FAX・メールで編集部へ(締切12/15)。〒住所、氏名、TEL、本紙入手先、感想をご記入ください。

「添加物は魔法の薬。つくり方を機械化し、美味しそうに見えることも安定供給もできません。しかし体に悪いので使えません。長女はハムやかまぼこが給食に出ると、決まってアトピーが悪化、じん麻疹になりました。添加物の毒性については世間であまり認知されていない頃でしたが、長女の体が教えてくれたのです。」

食に安心のある仲間たちと情報交換をしながら、食品添加物について研究した山本さん。添加物や農薬の怖さを知れば知るほど「食べものについて、いかに無知であったか」と思い知らされました。

栄養を考慮するのはもちろん、一つくり手の顔がわかり、自分が納得したものを選んで食べたという思いが強く、砂糖は新光糖業の「洗双糖」を使用。グラニュー糖の白さ、強烈な甘さはないけれど、上品な甘みと豊富なミネラルが特徴です。小麦粉も安い輸入品に頼らず、国産品を使用。ポストハーベストや日本の自給率、フェアトレードなどさまざまな問題の現状を知り、自分のできることで取り組んでいます。

さらに今後は、本来の野菜の旨みに注目し、野菜が苦手な人も食べられる美味しい野菜ケーキをシリーズ化していきたいと山本さん。

「自分たちの口に入る食べ物、しかもケーキといえは子どもたちの大好物。これからは、安全で美味しいものをモットーに日々精進していきたいと思っています。」

http://www.naturland.jp/

## 10人のお母さんに学ぶ子育ての極意

記念すべき最終回に、今日はお母さん「日本のお母さん」岸信子さんをご紹介します。岸さんは、



池川クリニック院長 池川 明  
●東京大学医学部大学院卒。医学博士。1989年横浜市に、産婦人科・池川クリニックを開業。「胎内記憶」の第一人者として活躍。著書やDVDも多数。

第一回福永児童文学賞受賞作品「こちらたまご、応募願います!」の作者で、虫プロ作成のアニメ映画の原作者です。私との関わりは、「生命尊重」の立場から遺伝子研究の第一人者、筑波大学村上和雄先生のご紹介で当クリニックに取材に来られた千葉茂樹監督です。ドキュメンタリー映画「マザー・テレサとその世界」で世界に先駆けマザー・テレサを世に知らしめた監督で、『お母さん業界新聞』にも取り上げられたこともある方です。その監督が岸さんの絵本を持参され、アニメ映画化したいという話で、私に協力依頼が来たのです。ようやく完成した命の大切さを訴えるDVDアニメに、付録として私の解説映像も入っています。今、全国各地の学校で大きな反響を得ています。

その原作者の岸さんに、11月20日、横浜の講演会でお会いすることができました。「10代子育て塾」と銘打った連続講座があり、最終回は、岸さんと私のジョイント講演会が企画されたのです。岸さんのお話はとても面白く、引き付けられました。「お母さん業」というものを楽しくお話しするその笑顔は、とても輝いていました。

10人のお子さんを育てていく過程はとても興味深く、長男、次男と育てていきながら、いろいろな気づきがあったそうです。いくら子どもを愛していても、子どもに代わり親が問題解決などできるわけがないと気づいたとき、お母さんとしての役目が見えてきたというのです。

外でいろいろなことがあって、傷ついて帰ってきた子どもに、親ができることはごくわずか。家に帰った子どもが、ホッとする時間、心を充電する環境があれば、翌日もまた元気が出ていくことができます。

また時として、お母さんが勘違いをして子どもを傷つけてしまうことがあります。そのとき「完璧なお母さんはいない。失敗したらごめんと言って、またがんばればいいよ」という夫の一言に救われたそうです。

そして、絶対に子どもを怒らないお母さんを目指すのは辛いけれど、「できるだけ」怒らないお母さんを目指すようにしたら、子育てが楽になったそうです。

子どもを叱ったあとに、子どもをキュッと抱きしめ、子どもの心を充電してあげれば、子どもは力強く生きていく。母親はそんなことができればいいという岸さんのお話は、子育ての悩みを抱えながら「お母さん業」に励んでいるお母さんたちを、大いに勇気づけるでしょう。

これでコラムは終了です。長い間おつきあいいただいた皆様に、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。